



白糠町立白糠小学校



白糠町立白糠中学校



小中一貫教育推進

グランドデザイン  
grand design



平成30年 2月23日 第1版

平成30年 3月 6日 第2版

平成31年 4月 2日 第3版

# 1

## 15の春を迎える子どもの目指す姿

### 夢や希望の実現に向け 他者と支え合い 努力する人

知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきている。そのような社会に対応するためにも、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となる子どもたちに、必要な資質・能力を育むことが急務である。

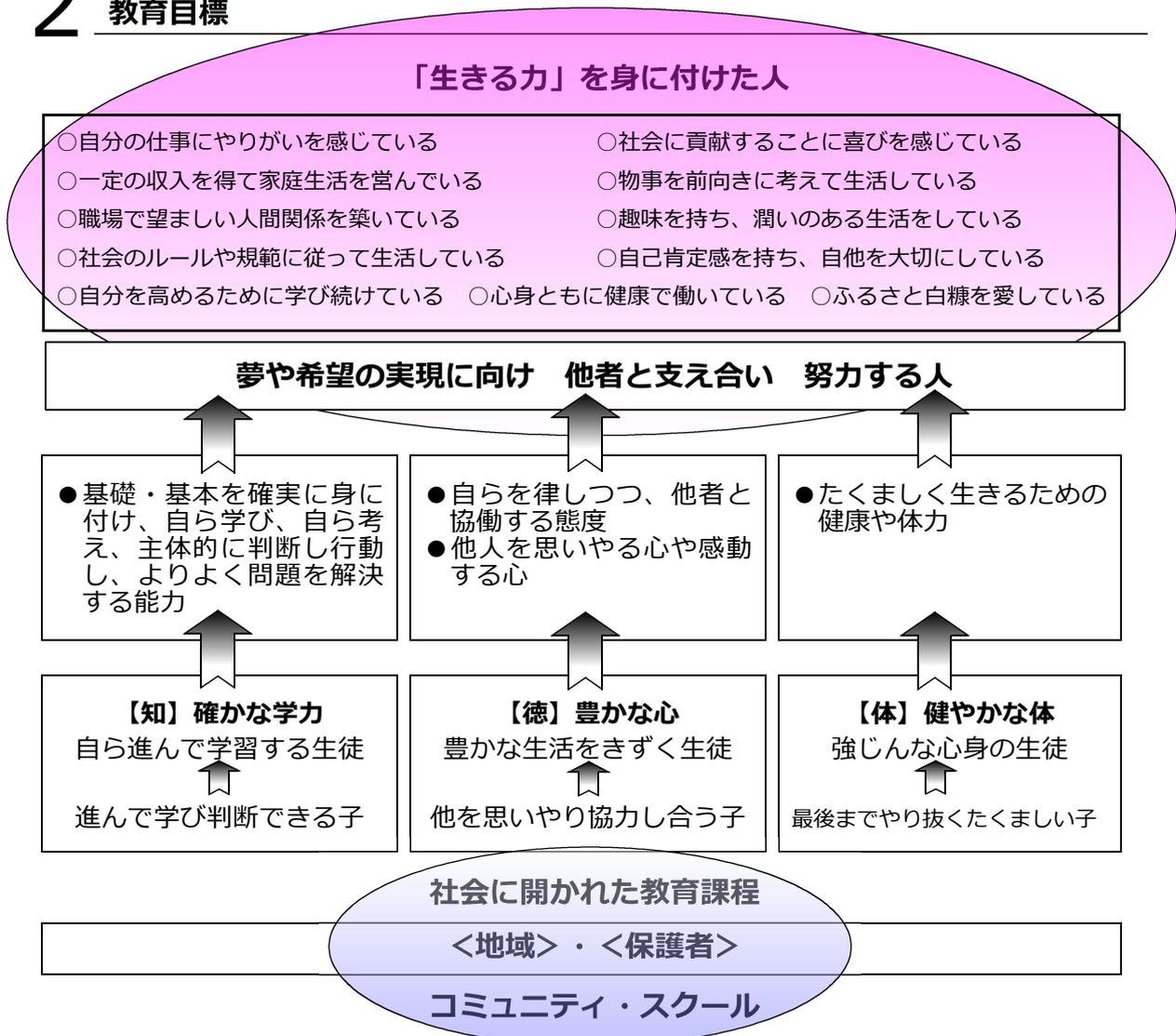
とりわけ、よりよい社会の創造には、夢や希望をもち続け主体的に生きていくことが求められ、そのためには高い自己肯定感の醸成が必要不可欠である。

自己肯定感を高めるためには、他者との関わりや逆境における「傷つくリスク」を受け止め、乗り越えていく勇気を身に付けることが求められる。他者との関わりで求められる生き方は、「自分も相手も大切にする」想いや態度である。また、勇気は、ありのままの自分を受け止めてくれる「還る家（居場所）」があると湧き出てきやすい。還る場所である「ふるさと」に想いを寄せる子どもたちを育成することを意識していきたい。

これら、自己肯定感の醸成と合わせ、課題解決・自己選択、自己決定、自己実現をめざし、来たるべき未来に向けてたくましく自己指導力をもった児童生徒の育成が必要である。

# 2

## 教育目標



### 3 目指す学校像・教師像・家庭像・地域像

#### 【目指す学校像】

自分も相手も大切にして安心して過ごせる学校 正しく生きる者が報われる学校

#### 【目指す教師像】

子どもの成長に対して、謙虚さのある情熱を注ぎ、常に反省的実践をする教師

#### 【目指す家庭像】

ありのままの子どもを受け止めて、誠実に想いを伝え、互いに信頼し合える家庭

#### 【目指す地域像】

子ども育むのが社会の役割であることを自覚し、と協働する地域

### 4 一貫教育が行われる組織とは、どんな組織か

すべての教職員が、具体的な「理論知」を共有して、共通尺度で教育を語れる組織

(1) 9年間を見通した「5つのカリキュラム」を実施する。

- ① ふるさと教育
- ② 各教科の領域別系統表（共通指導と乗り入れ指導の明確化）
- ③ 生活指導上の生活スタイル（校内外のきまり）
- ④ 健康教育上の生活スタイル（生活リズム）
- ⑤ 協働スキル（聴く・伝える・話し合う）の「到達目標」

(2) 目指す子どものイメージ像を全職員が説明できる。

目指す姿：自己指導力を身に付け、協働し、目標の達成を目指して努力する姿

- i 自分で決めて、責任を負うことができる（自己決定）
- ii 自分も相手も大切に作る言動や判断・行動ができる（共感的人間関係）
- iii ありのままの自分を受容し、他者貢献を実感している（自己存在感）
- iv 客観的に自分を観察し、傷つくリスクも受容できる（メタ認知・ストレス耐性）
- v 学習指導要領で求められる資質・能力が身に付いている。

(3) 児童生徒理解の理論値を共有している。

- ① 児童生徒理解の定義を持ち合わせている。
  - ・「子どもの特性」
  - ・「教師の特性」
  - ・「子どもと教師の関係性」
- ② 「子どもの特性」を分析するときの理論値を共有している。
  - ・「人物論」ではなく、「関係論」で観察する。

- ・「原因論」ではなく、「目的論」で観察する。
- ・「所有論」ではなく、「使用論」で観察する。
- ③ 「教師の特性」や「関係性」を分析する理論値を共有している。
  - ・「PM理論」で自己分析する。
  - ・「交流分析」で自己分析する。
- ④ 「協働」「コミュニケーション能力」の理論値を共有している。
  - ・聴くスキルの理論値を共有している。
  - ・伝えるスキルの理論値を共有している。
  - ・話し合う（交渉する）スキルの理論値を共有している。

(4) 教育活動、とりわけ授業をとおして、児童生徒を育てる意識（ベクトル）を合わせている。

- ① 教科における生徒指導の意義を共有し、生徒指導の機能を活かした授業展開を図る。
- ② 授業の場で児童生徒に居場所をつくる。
- ③ わかる授業を行い、主体的な学習態度を養う。
- ④ 共に学び合うことの意義と大切さを実感させる。
- ⑤ 言語活動の充実、コミュニケーションツールとしての言語力を育てる。
- ⑥ 学ぶことの意義を理解させ、家庭での学習習慣を確立させる。

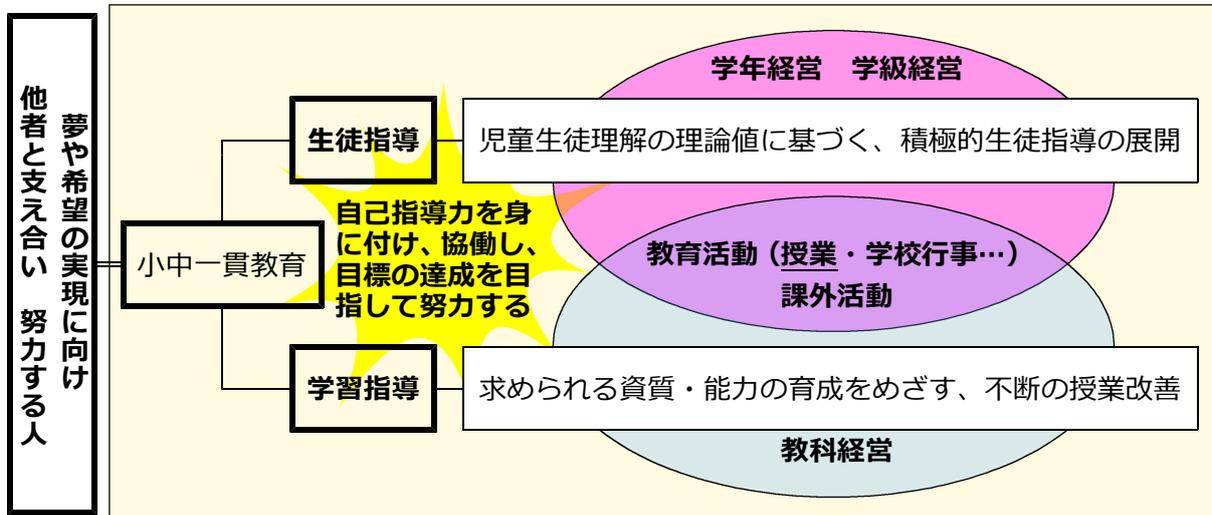
(5) 研究主題に沿った不断の授業改善ができる。

研究主題：**仲間と関わり合い、粘り強く課題に取り組む児童生徒の育成**  
 ～小中共通の問題解決的な学習をとおして～

- ① 求められる資質・能力（学力観）を共有している。
  - ・生きて働く**知識・技能**の習得
  - ・未知の状況にも対応できる**思考力・判断力・表現力**等の育成
  - ・学びを人生や社会に活かそうとする**学びに向かう力・人間性**等の涵養
- ② 未来社会を切り拓くための資質・能力の確実な育成を目指している。
  - ・変化に積極的に向き合う。
  - ・他者と協働して課題を解決する。
  - ・情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新しい価値へつなげる。
  - ・複雑な状況変化の中で目的を再構築する。
- ③ 不断の授業改善を図り、授業の質の向上をめざす。
  - ・「主体的な学び」（2年次）「対話的な学び」（3年次）を重点化
  - ・結果として「深い学び」を追究
  - ・「求められる資質・能力」の育成に寄与する授業の在り方を追究
- ④ 授業力の向上～発達段階に応じた、基本的な授業スキルを共有している。
  - ・魅力ある学習課題（解決の必然性のある課題）設定、学習形態（小集団）の工夫
  - ・意図的な（目的のある）指示、説明、発問の精選
  - ・目標と方法、評価が明確で、意図的・計画的な授業展開
- ⑤ 授業で活用できる学習規律を策定・改善し、共有（徹底）している。
  - ・生徒指導の機能を活かした授業展開 関わり合う、教え合う…
- ⑥ 教科系統表に基づき、小中一貫した指導内容の軽重、重点化を図る。
  - ・つまづきの予測、それに基づく指導計画
  - ・専科指導の拡充

## 5 モデル図

以上、1～4をまとめると、次のような図となる。



※ なお、同一町内に複数の異なる型の小中一貫教育校を有する本町においては、「分離型一貫校」としての実践を累積し、その成果を検証することが必要である。

また、情報提供の要求や広く発信することも想定し、実践や成果は適宜まとめておくことが必要である。

検証計画＝検証の時期（スパン・回数）や方法（検証項目・検定等）については、平成30年度中に確立し、立案でき次第随時運用する。

# 6 TO-DOリスト タスク・プロジェクト管理 (H29年度案)

(1) ねらい優先位の明確化 取組期間 評価時期等

戦略	戦術	H30	H31	H32
意識改革から 行動改革へ	目的と目標の共有	→	○	
	生徒指導観と指導スキル	→	→	○
	学習指導観と指導スキル	→	→	○
	授業観と指導スキル	→	→	○
発達段階に応じた 手立て	教科系統表の作成・理解	→	→	○
	教科担任制の導入・定着	→	○	
	相互乗り入れ授業	→	○	
	異学年交流	→	○	
	行事の効果的活用	→	○	
教育課程の編 成	学校経営方針	→	→	○
	教科（各領域・行事）	→	○	
	校務分掌	→	○	
評価項目 評価指標	学校評価 評価項目	→	→	○
	取組に対する評価・指標	→	→	○
	成果や課題の可視化	→	→	○

(2) 一貫推進乗り入れ等（中学校登校 専科制 定期テストの取組）

	平成29年度	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度
第5学年児童 登校日	1日	1日	平成30年度 中に策定		小中学校舎一体予定 (義務教育学校?)
第6学年児童 登校日	34日	約70日			
小学校専科制 の実施状況・ 予定	外国語 音楽 体育 社会	外国語 音楽 体育			
小学校定期テ ストの実施状 況・予定	第6学年3回 第5学年1回	第6学年3回 第5学年3回			
学習指導 要領	小	移行期間 → 教科書検定	→ 採択・供給	全面実施 使用開始	
	中	移行期間 →	→ 教科書検定	→ 採択・共有	全面実施 使用開始

※ 平成30・31年=設計 平成32年=施工 平成33年=供用=義務教育学校?

(3) 一貫教育推進スケジュール

項 目	H 3 0	H 3 1	H 3 2	H 3 3
教育理念	→	○		
教育の基本方針	→	○		
校訓	→	○		
教育目標	○			
目指す子どもの姿	○			
目指す学校像・教師像	○			
目指す家庭像・地域像	○			
各教科の指導計画	○			
校内外のきまり	→	→	○	
学習規律	→	→	○	
学校行事	→	→	○	
児童会 生徒会	→	→	→	○
部活動 同好会	→	→	→	○
P T A組織	→	→	→	○
コミュニティ・スクール	→	→	→	○

# ＊

## 雑録 私見ですが

- 1 「やった！9年間かけて、子どもを成長させることができる！」という感覚がほしい。  
→ 教員にそれを醸成するに、即効性は考えられない。じわりじわり…  
「気付いたら、はまっていた」「ちょっと、他の学校にも見せたいね、伝えたいね」  
→ 最低でも、小・中学校ともに、教員が**9年間の「見通し」**をもたなければできない。
  
- 2 学校において、「その場限りの教育活動」というのは決して多くない。  
多くは系統性、連続性、発展性を孕んでいる。その、すべてを取り上げて、小中一貫を語るのは無理。だからこそ、「**9年間で積み重ねていくもの**」の検討が必要である。  
職員の実態を考慮すると、「まずはやらせる」型から入るのが必要だとは思いますが、そうであっても、全体図を見通した中の計画でありたい。思いつきの、虫食い状態で、計画が先行しないようにしたい。  
→ ねらい（目的・目標）の集積 **発達段階に応じたレベルアップ**  
→ 何を積み重ねていくのか どうやって積み重ねるのか  
今までの実績とこれからの取組～精査・検討 ⇄ 計画・方法へ
  
- 3 一貫教育推進にあたり、付加価値・アクセントをつける、教育効果をあげる、目的を補完する…ための「イベント」を企画・運営させる。(ex：2分の1成人式 立志式<呉学園>) イベントづくりが目的ではない 手間ばかりかかり、教育効果のあがらない取組は論外  
→ 児童・生徒の関わりをメインとするイベント  
→ やらされ行事× 自主性・自発性を発揮する そのための導き  
→ 異年齢集団を活かした自治的な取組  
・先輩への憧れ、後輩を育てる意識の涵養  
・児童生徒の手による、相手に伝える・相手を育てるための、主体的で真剣な取組  
・その後、児童生徒自身で工夫を積み重ね、バージョンアップを図るような取組  
→ 児童への関わりに、責任をもたせる。組み合わせ方  

1 - 5	1 - 6	1 - 7	1 - 8	1 - 9
2 - 5	2 - 6	2 - 7	2 - 8	2 - 9
	3 - 6	3 - 7	3 - 8	3 - 9
		4 - 7	4 - 8	4 - 9
		5 - 7	5 - 8	5 - 9
		6 - 7	6 - 8	6 - 9
  
- 4 「平成33年4月から義務教育学校としてスタートすることになる」つもりで、今の取組を進める必要がある。同時に、コミスクへの対応も、手がけることが必要か…  
→ 職員室が一つに。校舎が一つに。そのメリットをより高次元で享受できる意識の涵養（期待感、待ち遠しい、こんなこともできる…）  
→ 人が変わっても残る理念 強い理念・教育観  
→ 5 - 4制へのこだわり× ⇄ 4 - 3 - 2制  
→ 地域リソースの開拓（学校の仕事かどうかは定かではない）  
→ P T A組織の改編 学校運営協議会 地域に委ね・地域の力を使う場面の検討（庶路学園の取組を援用）

- 5 **他地区への発信する、「モデル校」としての意識をもたせることが肝要である。「施設一体型」に比べ、「分離型が有利なこと」はそんなにない。(というかほとんどない)しかし、どの自治体も分離型一貫校の需要をもっており、多くの視察校(団体)が知りたがるのは、「分離型でもできること」である。**

それに応えることができる取組(目的・方法)と成果、課題は常に提供できるようにしておきたい。

## 6 **小中一貫に係る生徒指導**

教員間の一貫性のある指導が求められる。小、中の教員が互いの指導の良さと違いを学びつつ、理論値を共有して指導にあたる必要がある。9年間で起こりうる問題や児童生徒の心身の発達段階の理解を、ともに考え合い、全校的に生徒指導を実施する。そのために研修が必要である。

- スクールカウンセラーの効果的な活用
- 教育相談的な内容の研修
- 問題行動対応(もぐらたたき)にならない、主体的な生徒指導、児童生徒の自主的な活動についての指導方法等の研修
- 8につづく…

とりわけ、**教育相談の質**(量ではない)の充実が必要であり、その教育相談の手法は、授業の中で、また授業以外の教育活動全般で活用できるよう、工夫すべきである。

- 体験型教育相談手法とか新しい教育相談手法といわれる(Tカバタケ氏が詳しい)生徒指導提要では、次の例があげられる。

(構成的)グループエンカウンター	ピア・サポート・トレーニング
ソーシャル・スキル・トレーニング	アサーション・トレーニング
アンガー・マネジメント	ストレス・マネジメント
ライフ・スキル・トレーニング	キャリア・カウンセリング

## 7 **小中一貫教育が具体的に推進される場面や機会**

日常の授業を中心とする、教育活動(場面・機会)のすべてである。

教育活動は、目標を達成すべく、意図的・計画的に行われるものでなければならない。その中に生徒指導の理論値(考え方)が活かされ、方法として確立されていなければならない。したがって、教員に求めるべき資質・能力は、生徒指導力、学習指導力の両輪で追究されることが必要である。

例えば、発達促進的・開発的な教育相談技能をもっており、親身になって生徒に関わることができ、生徒からの信頼も厚い教師がいた。しかし、授業技術はからっきしで、教材研究もせず、授業はつまらない。わかる授業ではない。生徒からの人気はあるし、生徒指導力はあるので、授業が崩壊することはないが、さっぱり学力はつかない。

往々にして、学習指導がちゃんとでき、授業がおもしろいと評される教員は生徒指導もできている場合が多い。生徒指導の機能をつかった授業展開をするからだ。しかし、逆は必ずしもそうではない。卓越した生徒指導力を背景とした授業を行い、それが「良い授業」だと勘違いする輩は(特に中学校に)多い。

子どもたちが身に付ける資質・能力は当然、学習指導要領で求められる資質・能力と整合性が図られている必要がある。

教える場面・育てる場面・鍛える場面をきちんと位置付けないと、指導がぶれるし、自己

指導力の育成は困難。指導のぶれは、効果を半減させる。**小中で一貫して、発達段階に応じた考え方を共有、徹底しておくことが大切である。**学習規律などはその中で、位置付けられる必要がある。

そもそも、小中一貫教育は義務教育を充実させるための教育手法としてクローズアップされてきた。前述のように、モデル（校）として、実践を示すことが求められるのであれば、その充実の度合いを検証しなければならない。（検証には、検証計画が必要であり、検証方法の提示は避けて通れない。）すなわち、白糠地区の教育活動の成果をあわせたととき、小中一貫教育は、「生きる力」を身に付けた子どもを育成する点において、より効果的に機能することを立証する必要がある。

8 目指す児童生徒の姿に係り、本町の実態を勘案し、配慮を要することとして、次のようなことが考えられる。

・家庭の教育力の底上げ（家庭の意識の底上げ 規範意識 学力観＝学力の危機感）

学校が家庭に 実態（情報）を正しく伝える。

学校が家庭に 目的や目標（区別する）を伝える。

学校が家庭に 対応策を提案できる。

学校が家庭に あきらめしないで、粘り強く働きかける。

学校は子どもの 学習意欲を向上させることができる。学びの意義を理解させる。

学校は子どもに 学習方法（家庭でどのように学習したら良いのか）を提示できる。

学校は子どもに 基本的生活習慣の大切さ、定着方法を提示できる。

⋮

・家庭（地域）がしつけられない、社会的能力の育成

→ 自己指導力に結びつけることが肝要

社会で生きるための能力

「自己表現力」「自己コントロール力」「状況判断力」「問題解決力」

「親和的（人と親しく交わる）能力」「思いやり」など

（他にも、問題行動の心理環境的背景にあるものとして…）

・人間への基本的信頼の欠如

周りの人間は「良い」存在であるという経験、愛され、可愛がられる環境や他者の働きかけ、「人間の良さ」の積み重ね（他者に対する信頼感の基本）の欠如

→ 教師が、自分だけでも「人間の良さ」を感じさせ、体験させたいという思いをもって関わる必要がある

・心のエネルギーの枯渇

安心して過ごせる。自分の気持ちをよくわかってもらえる。充実感を体験する。

認められるといった体験（心のエネルギーの源）の欠如＝不安・放任

→ 学校で、「安心感を与える」「楽しさや充実感を感じさせる」「よく認め、よくほめる」等が必要 エネルギーがないのに、「我慢」「頑張り」は無理

・学校の教育風土の改善（教員の教育に向かう姿勢）

小・中ともに、スタンダードをぶらさない

プライドをもった教育活動の展開（白小プライド、白中プライド）

目的意識をもった教育活動の展開 目標の設定

（小中ともに、発達段階に応じてめざすことを共有している＝これの設定もいるか…）

成就感・満足感・達成感…を味わう児童生徒集団がスタンダードにあることが必要